

【安藤昌益研究の最前線（その2）】

安藤昌益の稿本『自然真営道』を所蔵していた北千住の
橋本律蔵が浅倉屋から入手した文雄の『非出定後語』
の「原本」（橋本律蔵旧蔵本、律蔵自筆の「識語」あり。）
の発見について

和田耕作

（Kosaku Wada）

1 はじめに

安藤昌益の稿本『自然真営道』を所蔵していた北千住の仙人・橋本律蔵とその周辺については、「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会」が2004年5月から精力的に調査を進めており、大きな成果をあげてきた。

しかし、橋本律蔵旧蔵の文雄『非出定後語』については、すでに何人かの人々が、先行研究で調べているためか、解決済みと思われてきたようである。

私は、これまで主に紹介されてきた橋本律蔵旧蔵の『非出定後語』（国立国会図書館、亀田文庫本）は、「原本」（橋本律蔵が浅倉屋から入手した写本）そのものではなく、その「副本」であることを突き止め、その「原本」（橋本律蔵旧蔵本、律蔵自筆の「識語」あり。）を発見したので、ここに報告したい。

その発見日は、2011年8月10日である。

その後、諸般の事情により、報告が今日になってしまった。

2 橋本律蔵が浅倉屋から入手した文雄の『非出定後語』の

「原本」（橋本律蔵旧蔵本、律蔵自筆の「識語」あり。）

の発見

私が、この「原本」（橋本律蔵旧蔵本、律蔵自筆の「識語」あり。）を見つける端緒となったのは、2011年8月5日、本郷の古本屋で、『日本思想闘争史料』の第三巻（鷲尾順敬編、昭和五年、東方書院）を入手してからである。

この本には、富永仲基の『出定後語』、文雄の『非出定後語』、潮音の『摺裂邪網編』などが収められている。

その文雄の『非出定後語』の末尾には、あの有名な橋本律蔵の「識語」が、行間の文字もそのままの形で正確に翻刻されていたのである。

つまり、橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「原本」（律蔵が浅倉屋から入手した写本）からの翻刻が、すなわち、これにほかならない。

まもなく（2011年8月10日）、私は、国立国会図書館において、その橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「原本」（下記、和田耕作メモの①）を発見したのである。その時点では、当然、まだマイクロフィルム化（または、デジタル化）されておらず、私が最初にこの本のマイクロフィルム化（または、デジタル化）を行なったのである。

次に、その発見時の私のメモを示す。

◎ 和田耕作の発見時のメモ ◎

橋本律蔵旧蔵の文雄『非出定後語』 国立国会図書館にあり

2011. 8. 10 和田耕作確認済み

① 文雄『非出定後語』（橋本律蔵旧蔵、現在・国立国会図書館蔵）

橋本律蔵が浅倉屋から明治14年に入手したもの

虫食いあり 江戸時代の写本である 29丁 （*注）

律蔵が明治14年入手 巻末に律蔵自筆の「識語」あり

請求記号 209-656 マイクロフィルム なし

、 和田耕作が 作製印画依頼（2011. 8. 10）

*注）『富永仲基研究』の梅谷による書誌には、「読出定後語」（二丁）・本文二十八丁、計三十丁」とある。
当時の和田による確認は、国会図書館の蔵書カードにしたがったものと思われる。

② 文雄『非出定後語』（橋本律蔵旧蔵本からの写本、現在・国立国会図書館蔵）

亀田次郎文庫にあり 29丁 明治の写本

請求記号 181-To478Mh マイクロフィルム あり

外題 「非出定後語」

内題 「非出定」

亀田次郎文庫目録に「橋本律蔵手写」とある

これまでの先行研究でたびたび紹介されてきた「国会図書館・亀田文庫本」を、「副本」（上記、和田耕作メモの②）と呼び、以下に検証してみよう。

3 橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「副本」（亀田文庫本）の 先行研究の検証

1) 川原衛門『追跡 安藤昌益』（1979年5月、図書出版社） について

川原は、国会図書館で「非出定 文雄作 橋本律蔵手写」の
カードを見つける。

川原は、開巻一丁目に、「珍藏、 非出定後語 無相文雄」とある、と紹介しているが、これは正確ではない。

一丁目には、「珍藏 / 非出定後語 全」とあり、

二丁目に、「副本 / 非出定後語 無相文雄」とあるからである。

川原は、なぜか、ここに「副本」とあるのを紹介していない。

そして、これを「全文 橋本律蔵手写」として紹介したのか。それは、その目録のカードに「橋本律蔵手写」と書かれていたからであろう。

『亀田次郎旧蔵書目録』（昭和35年3月、国立国会図書館）には、

「文 雄 181. - T o 478M h

非出定 橋本律蔵手写 明治14 29丁 28cm 元表紙

外題「非出定後語」 識語あり 」

とある。

この目録を作成した人は、その「原本」の存在を知らず、橋本律蔵の筆跡も当然認識していなかったので、「律蔵」の「識語」と本文の筆跡が同じであることから、「橋本律蔵手写」と記したのであろう。

この「副本」（亀田文庫本）にある橋本律蔵の「識語」は、「行間の文字」がきれいに文中に挿入されているものである。後に見るように、「原本」では、行間に書き入れがある。

川原は、この「副本」の律蔵の「識語」を「奥書」として、『追跡 安藤昌益』の八十四-八十五頁に口語訳とともに紹介している。ただし、最後の二行分を省略している。それを、以下に示す。

「説蔵モ今ハアルコトナシ。大意ハ翁文ニ見ユ。翁文モ先年得タリ。

之レハ板本ニテ内田銀蔵子モ一本写シタリ。今モ蔵スベシ。 」

ここに「内田銀蔵子」とあるのは、千住の川魚問屋「鮒与」の主人・内田与兵衛（幼名銀蔵）である。

2) 新谷正道「紹介 橋本律蔵関係資料について」

（「安藤昌益研究」第5号、1992年8月）について

新谷正道氏は、川原衛門の後を受けて、同じく国立国会図書館所蔵・亀田文庫の「副本」（前記、和田耕作メモの②）の現物を調査し、「安藤昌益研究」第5号に紹介している。

新谷氏は、これを「副本」である、とは述べているが、川原衛門と同様に「橋本律蔵写本」として紹介している。

新谷氏は、

一丁目の、「珍藏 / 非出定後語 全」と、

二丁目の、「副本 / 非出定後語 無相文雄」を省略して、

三丁目から五丁目、および巻末の「識語」部分を含む二葉を

「律蔵の肉声が窺えるものとしては唯一の貴重な資料」として

影印版で紹介している。

また、川原衛門が「識語」末尾の二行を省略していることも指摘している。さらに、新谷氏は、梅谷文夫・水田紀夫著『富永仲基研究』（昭和59年、和泉書院）の中の記述についても触れているが、これについては後述したい。

なお、新谷氏は、2016年5月発行の「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会通信」第73号の論考の中でも、この橋本律蔵の「識語」を一部分省略して引用している。

3) 稲葉克夫『八戸の安藤昌益』（平成14年3月、八戸市発行）

における橋本律蔵の「識語」の検証

稲葉克夫は、『八戸の安藤昌益』の中で、橋本律蔵の「識語」の全文を紹介している（一七八頁）。

稲葉は、この「識語」をどこから引用したのであろうか。それは、稲葉の恩師・宮崎道生博士が、内藤湖南（1866－1934）の「内田君の家学淵源」という文章に橋本律蔵が出ていることを発見し、稲葉にそれを教えたということから理解できる。

宮崎道生（1917－2005）は、『近世の日本・日本近世史』（内田銀蔵著、東洋文庫、昭和50年）を校注し、その解説文の中で、湖南の文章などを参照して、橋本律蔵についても触れている。

私は、内藤湖南の「内田君の家学淵源」（「芸文」10巻12号、大正8年）を、国会図書館でコピーしてきた。それによると、かつて文雄がいた了連寺の伊藤祐晃上人が、帝国図書館（現、国立国会図書館）で、「非出定」を発見し、その「副本」（写本）〔本稿では、この「副本を」、「副本B」と呼ぶ。〕を作成して、湖南に贈与したという。

湖南は、その「副本B」（写本）から律蔵の「識語」全文を、「内田君の家学淵源」に紹介している。稲葉は、この湖南の「内田君の家学淵源」を参照して、『八戸の安藤昌益』において、律蔵について述べ、さらに、その「識語」全文を紹介したのである。

湖南の「内田君の家学淵源」にある「識語」全文と、国立国会図書館所蔵・亀田文庫の「副本」（前記、和田耕作メモの②）の「識語」全文とを比較してみると、ほぼ一致していることがわかる。

律蔵の「識語」の最後の二行を、以下に引用する。

「説蔽モ今ハアルコトナシ大意翁文ニ見ユ翁文モ先年得タリ

之レハ板本ニテ内田銀蔵モ一本写シタリ今モ蔵スベシ」

（湖南「内田君の家学淵源」より）

ここでは、「内田銀蔵」の後の「子」という一字が欠落している。

誤写であろう。

伊藤祐晃（1873－1930）が帝国図書館で発見した「非出定」とは、橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「原本」（律蔵が浅倉屋から入手した写本、前記和田耕作メモの①）ではないかと思われたが、その「原本」の「識語」と内藤湖南本である「副本B」（写本）とは一致していない部分が多い。これはどういうことであろうか。

「原本」には、「帝国図書館」の印があり、これが図書館に収蔵されたのは、明治34年9月であることも示されている。

湖南の「内田君の家学淵源」の「識語」と、それにより稲葉が紹介している「識語」が、「原本」ではなく亀田次郎文庫の「副本」と一致しているということは、「内藤湖南旧蔵本（写本）〔「副本B」〕は、亀田次郎文庫の「副本」と同じ系統のものであるということになる。したがって、本項において検証した。

ちなみに、亀田次郎（1876－1944）は、昭和19年に没し、その蔵書が国立国会図書館に収蔵されたのは、昭和24～29年である。

なお、稲葉克夫は、「安藤昌益と橋本律蔵」（「弘前大学國史研究」66号、1977年7月）において、湖南の「内田君の家学淵源」から引用して、橋本律蔵の「識語」をすでに発表していた。この論文については、新谷氏が「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会通信」第73号（2016年5月）の論考の最後に引用し、紹介している。

本稿では、稲葉克夫『八戸の安藤昌益』（平成14年3月、八戸市発行）により検証した。

4 橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「原本」について

いよいよ橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「原本」（律蔵が浅倉屋から入手した写本、前記和田耕作メモの①）について見てゆこう。

実は、この「原本」は、すでに梅谷文夫・水田紀夫著『富永仲基研究』（昭和59年11月、和泉書院）において、紹介されているものである。

そして、この『富永仲基研究』では、律蔵の「識語」の全文も丁寧に、行間の文字も「原本」通りに、すでに紹介した『日本思想闘争史料』の第三巻（鷲尾順敬編、昭和五年、東方書院）よりも、さらに厳密に翻刻されているのである。

「原本」の書誌学的事項については、『富永仲基研究』の二四九－二五〇頁に梅谷氏により、極めて詳細に記述されているので、ここでは省略したい。

梅谷文夫は、その書誌学的紹介の中で、

「前表紙見返し右下に『浄土宗鎮西派京寺町／了連寺住持／無相文雄上人／作』と四行に墨書。橋本律蔵の手蹟と思われる。」

（『富永仲基研究』二四九頁）

と、「識語」のほかに、この前表紙見返し右下の書き込みも、律蔵の自筆と思われるとしている。確かに、この四行は、「識語」と同じ筆跡であり、律蔵が書いたものである。

◎律蔵自筆の前表紙見返し右下の書き込み◎

（国立国会図書館蔵・橋本律蔵旧蔵本〔「原本」〕より）

浄土宗鎮西派京寺町
了蓮寺住持
無相文雄上人
作人

この『富永仲基研究』（梅谷文夫・水田紀夫著、昭和59年、和泉書院）という本は、たいへん高価なこともあり、これまで昌益研究者でも読んだ人は、ほとんどいないのではないだろうか。私自身もこの本の存在はとっくの昔に知ってはいたが、所持していなかった。先にあげた新谷氏の紹介文の中で、この本に触れている部分を読み、つい最近（2016年10月1日）この本を入手したばかりである。

したがって、私はこの『富永仲基研究』を参照してから「原本」（前記、和田耕作メモの①）を発見したわけではない。

新谷正道氏は、「安藤昌益研究」第5号で、国立国会図書館所蔵・亀田文庫の「副本」についての紹介文の中で、次のように述べている。

〔 〕内は、和田による補足説明。

「この資料〔「副本」（亀田次郎文庫本）〕は、梅谷文夫・水田紀夫著『富永仲基研究』（和泉書院、一九八四年刊）でも梅谷氏により「国立国会図書館蔵（橋本律蔵旧蔵）写本」として紹介されているが、川原氏が紹介されたものと用字に若干の違いがあり、川原氏が閲覧されたものも律蔵自身の手写本ではなく、同じ国立国会図書館の副本（梅谷氏は「律蔵が何者かに委嘱して作成したのであろう」と推測されている）と思われる。律蔵の肉声が窺えるものとしては唯一の貴重な資料なので、国会図書館の許可を得て参考のため影印版で紹介する。」

（新谷正道、「安藤昌益研究」第5号より）

この新谷氏の紹介文は、「原本」の存在を認識していないものであるから、当然正しい記述ではなく、注意して読む必要がある。

梅谷氏が、『富永仲基研究』の二四九頁で「国立国会図書館蔵（橋本律蔵旧蔵）写本」と紹介しているのは、「原本」（前記、和田耕作メモの①）のことであり、新谷氏が紹介しているのは、川原衛門が紹介した「副本」（亀田次郎文庫本。前記、和田耕作メモの②）だからである。

新谷氏は、「川原氏が紹介されたものと用字に若干の違いがある」ことには気づいていたが、それが「原本」であることには、気づかなかった。

梅谷氏は、『富永仲基研究』の「国立国会図書館蔵（橋本律蔵旧蔵）写本」の書誌学的紹介の最後に、「原本」の請求番号二〇九・六五六を示した後、次のように述べている。〔 〕内は和田による説明である。

「国立国会図書館蔵（橋本律蔵旧蔵）写本〔これは「原本」を指す。以下、「原本」の紹介がある。〕・・・・・・
〔省略〕・・・・・・

・・・・請求番号二〇九・六五六〔これは「原本」の請求番号である。〕。

なお亀田文庫にこの本の副本が蔵されている。律蔵が何者かに

委嘱して作製したのであろう。識語の「今迄死セズ」を「今直死セズ」としている。（梅谷）」

（梅谷・水田『富永仲基研究』二五〇頁）

梅谷氏が、「原本」の書誌学的紹介の中で、亀田文庫本（「副本」）に言及しているのは、上記引用の「なお亀田文庫・・・・」以降の文章だけである。

新谷氏は、ここに示されている「原本」の請求番号（請求番号二〇九・六五六）が、新谷氏が紹介した亀田文庫本（「副本」）の請求番号（請求番号181. - T o 478M h）と違うことにも気づかなかった。

私が、発見した「原本」（前記、和田耕作メモの①）は、以上のように、梅谷文夫・水田紀夫著『富永仲基研究』において、すでに紹介されていたのであるが、安藤昌益研究者たちにはこれまで全く知られていなかったと言えるだろう。

梅谷氏の「原本」についての書誌学的紹介に、私がここで、一つだけ追加するならば、最終頁（「識語」の次の頁）に「文淵」の小印字があることである。これは浅倉屋の堂号「文淵閣」の意で、すなわち、「文淵閣浅倉屋」が販売した書物であることを示しており、「浅倉氏ヨリ得テ」という律蔵の「識語」の中の記述と一致する。吉田文夫の「文淵閣・浅倉屋のこと」（『浅倉屋書目』2016年10月、浅倉屋書店）によれば、当時、浅倉屋は、八代目久兵衛（文積）の時代であった。

「原本」の橋本律蔵自筆の「識語」と「副本」の「識語」の相違点の一つは、梅谷氏が「今迄死セズ」を「今直死セズ」としている点をあげている。その他の相違点も含めてみておこう。

【律蔵自筆の「識語」】

- ・「今迄死セズ」
- ・「タバコヤ」
- ・カタカナ多し。
- （例：ヨリテ、ミテ、
ロンゼシ、アラン、
ハカリ、など）

【「副本」の「識語」】

- ・「今直死セズ」
- ・「煙草屋」
- ・漢字多し。
- （例：由リテ、見テ、
論ゼシ、有ン
計リ、など）

・行間に文字あり。

・行間の文字を本文に挿入。

◎橋本律蔵自筆の「識語」◎

(国立国会図書館蔵・橋本律蔵旧蔵本〔「原本」〕より)

明治四年十一月廿六日
予此書ヲミント欲書林ニ求東京中及大阪等處ニ更ニ見ル
本居宣長ノ見タヨシ玉勝間ニテ又後叙ノ後語ヲ
ミセシ笑語ヲ喜者トシ海ノ人相契ヲ繼篇ニテ西教寺ニ必
聲帯フレコヲハカリ山部ニ無難トモ同寺ニ所縁見テモシテ同マイト
モサミ見ルヲ極メテ見タヨシ玉勝間ニテ又後叙ノ後語ヲ
ナルヨシアリサニ先見ノ違ハサルヲ得痛中ヲヤクトハ今止死セズ
奇書ニ當スルヲ得ル奇快ヤミスカズ但願多ク為憾耳
仲基短命アリトモ不知幾歳ヲ説故ニ今ハアルコト大意ハ猶文ミニ初文モ
老年得タリコレ板本ニテ内田銀藏子主本ト馬ミタリ今蔵スベシ

橋本律蔵
五十七

◎『日本思想闘争史料』第三卷より、律蔵自筆「識語」からの翻刻◎

弱冠コリテ此書ヲミント欲シテ、數十年間書林ニ志メ、東京ハ巾ニ及ズ、浪華^{ワウワ}開京トモ更ニアルコトナシ。
 本居宣長ハ見タルヲシ、玉勝間ニイグルコシ、ヨリテ玉勝間ヲ具、又萬里ノ出定後語ニヨリテ、ロンビシ笑語ヲミ、又西教寺
 ノ海海上人ノ獨觀邪制篇ヲモミテ、西教寺ニハ必此書ヲフンコトヲハカリ、山部仁兵衛ナルモノハ、同寺ニ所縁アルヲ以テ託
 シテ問フトイヘドモ、サラニ見ルヲ得ズ、今日淺倉氏コリ得テ初メテ一見シ、悦ビコレニマスモノナシ。印ヲミレバ西教寺ノ
 藏本アルコトアリ。サラニ坐見ノ題ハザルヲ知ル。律藏中風ヲヤムトイヘドモ今迄死セズ。日ヲ奇書ニ爲スルヲ得ル奇快、實
 ニイノベカラズ。但寫誤多シ爲憾耳。
 仲基ハ短命ナリトミ、不知幾歳ナリシヤ、脱藏セ今ハアルコトナシ。大寛ハ鉛文ニミル、鉛文モ昔年得タリ。コレハ板本の
 ナ内田銀藏子モ一本算シタリ、今モ藏スベシ。
 明治十四年十一月十六日記ス

橋本
 三十七歳

5 橋本律蔵自筆の「識語」発見の意義と『雑記』の著者の検証

すでに見たように、これまで橋本律蔵自筆の写本とされてきた、
 国会図書館亀田文庫本は（請求番号181.-T o 478M h）、「副本」
 であり、その筆跡は律蔵によるものではなく別人によるものである。

したがって、今後は、上記に紹介した国会図書館所蔵の「原本」（請
 求番号二〇九・六五六）の橋本律蔵自筆の「識語」の筆跡を参考にし
 て、これまで発見されている律蔵関連の資料群を再検証することが
 求められる。

今回の橋本律蔵自筆の「識語」発見の意義は、まさにここにあるで
 あろう。しかし、橋本律蔵自筆の「識語」は、中風を病んだ後の最晩

年のものであり、その点の考慮は当然なされる必要がある。また、筆跡鑑定がすべてではなく、その資料の判定には、あらゆる情報を統合した精緻な分析が必要であることは言うまでもないことである。

ここでは、京都大学文学部・内藤文庫所蔵の橋本律蔵関連資料の中の『雑記』について検証してみよう。その他の資料群についての総合的検証は、別稿にゆずりたい。

図録『「日本百名山図会」と川村寿庵』（編集・岩手県立博物館、平成20年〔2008〕8月発行）には、京都大学文学部・内藤文庫所蔵の橋本律蔵関連資料群が紹介されている。以下の資料No.は、この図録による。

この図録の巻末にある「出品資料目録」には、「雑記」の著者について

（資料名） （作者名等）

〔図録No.70〕 「雑記」 「橋本律蔵カ」

〔図録のp36では「橋本律蔵」とある。〕

とある。

また、安藤昌益と千住宿の関係を調べる会により、以下の解説文が発表されている。

・「『雑記』解説文」（『2009安藤昌益研究発表会記録集』、

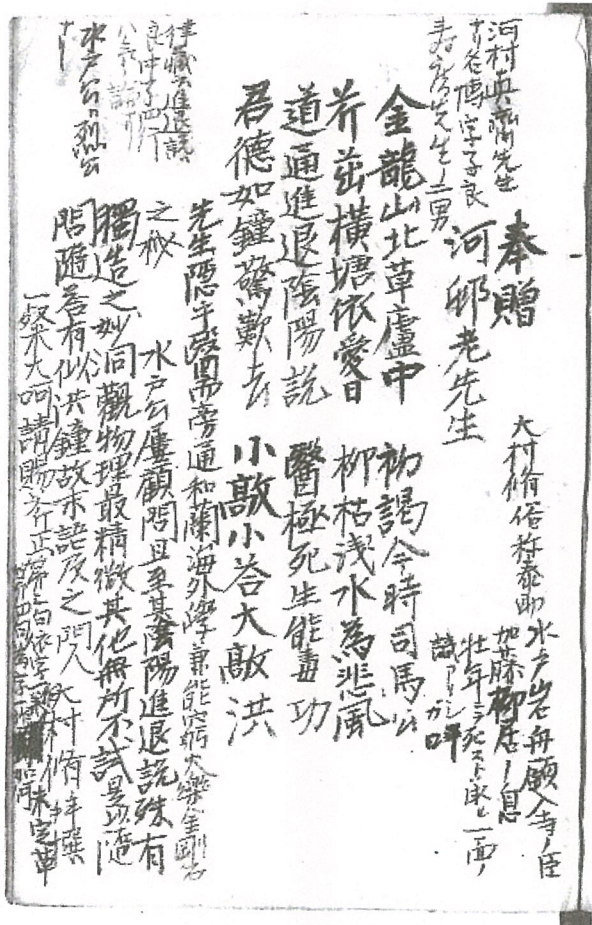
「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会」＝発行、2009年2月）

・笹島平吉「橋本律蔵氏の『雑記』について」（同、上）

以下は、笹島氏の解説による。

- ・橋本律蔵氏の明治8年～14年2月までの著作
- ・仏教関係の記述多し。
- ・西洋医学吸収への医師律蔵の「積極的な意志」。
- ・歌人でもある行誠上人との交友。
- ・律蔵の祖父橋本信好の「俳諧歌」あり。
- ・大村脩が川村真斎に贈った漢詩への、注釈。

「律蔵云・・・進退説ハ良中子四行八気ノ論ナリ」



京都大学文学部・内藤文庫所蔵の「雑記」の筆跡（和田耕作が独自に京都大学文学部にて複写したコピーによる）と、「原本」（前記和田耕作メモの①）の橋本律蔵自筆の「識語」の筆跡とを比較すると、同一人物の筆跡であることが明らかにわかる。

「雑記」の著者は、「橋本律蔵」であると、最初に述べたのは、矢内信悟氏である

「律蔵の長男知宣が東京府知事より夜会に招待されている文章も

転載されていますので、身内しか書き得ないことですから、『雑記』

の執筆者として、橋本律蔵と仮定してよいと思います。」（「調べる

会通信」第17号、2007年3月）。

それは、以上のように「雑記」の内容から結論づけたものである。

その直前、石渡博明氏は、「『雑記』は、・・・筆録者は記述がないためあいにく不詳であるが、記述内容から推して橋本律蔵の筆になるものではないかと推定される。が、疑問点もあり、現時点では、この点については保留しておきたい。」「『雑記』の筆跡は、京都了蓮寺の伊藤祐晃上人が、国会図書館で見出し、写本を贈呈された内藤湖南が内田銀蔵に照会したと言われる、橋本律蔵直筆とされる『非出定』の写本の字体とは一見したところ必ずしも一致せず、『雑記』が律蔵の手になったものであるとは言い切れないからである」（「直耕」第28号、2007年2月）、と述べていた。

この石渡氏の疑問は、「橋本律蔵直筆とされる『非出定』の写本」が、「副本」なのであるから、当然のことであった。

すでに見たように、図録『「日本百名山図会」と川村寿庵』（2008

年8月）の巻末にある「出品資料目録」には、「雑記」の「作者名等」の欄では「橋本律蔵カ」となっていた。

『2009安藤昌益研究発表会記録集』（「安藤昌益と千住宿の関係を調べる会」発行、2009年2月）では、「橋本律蔵氏の『雑記』」として確定発表された。

このたびの「原本」の出現により、橋本律蔵の自筆が確認され、その筆跡の比較のよっても、「雑記」の著者は、「橋本律蔵」であることが確定した。

橋本律蔵は、「米屋律蔵」と書いているように、米屋が主体の生活であったようである。そして、明治期の律蔵は、仏教の世界に非常な興味を示していた。

明治14年1月に記したと思われる三十四丁の表には、「非出定後語 無相文雄上人」とある。

律蔵が、その『非出定後語』を入手するのは、明治14年11月である。

6 《付論》 三村竹清『随筆 佳氣春天』（書物展望社、昭和10年）

に引用されている「橋本律蔵旧蔵の『出定後語』への書入れ」について

実は、梅谷文夫・水田紀夫著『富永仲基研究』（昭和59年11月、和泉書院）には、もう一か所橋本律蔵に触れた文章がある。

水田紀夫の執筆部分で、三村竹清『随筆 佳氣春天』（書物展望社、昭和10年）を参照しているところである（六十三頁）。この部分の初出は、日本思想体系43、『富永仲基・山片蟠桃』の水田の論考「『出定後語』と富永仲基の思想史研究法」（六五五頁）である。

では、三村竹清『随筆 佳氣春天』の該当部分から引用してみよう。

未賞。右数葉の幕は長二尺五寸の小形のものにて、然も表の字は八分篆書など、いづれも美事の書風なり。華も供へあれば、紀を守る子孫も速絶たるべく、尋ねなば委曲知るべけれど、旅なればそこくになしつ。

わがもてる『出定後語』には、明治十五年四月廿二日記として、千住の篤学者といはれし橋本律蔵氏の書入あり。

仲基はナカモトとよむべし、『翁文』にみゆ、一卷あり、『説蔽』は律蔵も未だ見ず、此翁桐江とも號せしか、『書畫集覽』に芳春とある此人か、『出定後語』の破書、非出定、文雄上人、律蔵いまだみず

明治十五年四月廿二日記

今潮音上人の所蔵を得たり、潮音上人の『彈擱邪網編』二卷あり、また『彈擱邪網編』といふ寫本あり、一巻、仲基は印坊に奉公せし由、行誡上人の話、印坊は宇治黄檗山の京師の一切經の板をすり出すところと云。

潮音上人は、駒込西教寺にて、特谷校齋とも親しく、行誡上人などもの問れし人なり。

（附記）予が得たる曹門品の奥に、法本非文字文字即眞詮會得本無二字々靈是圓洛城有一士世奉 大藏事大藏眞法寶堂無慕菴宜歸依我 貴尊朝音誡金言金言知是何誰究其曹門會諸善

「わがもてる『出定後語』には、明治十五年四月二十二日記として、

千住の篤学者といはれし橋本律蔵氏の書入あり。

仲基はナカモトとよむべし、『翁文』にみゆ、一卷あり、

『説蔽』は律蔵も未だ見ず、

此翁桐江とも號せしか、『書畫集覽』に芳春とある此人か、

『出定後語』の破書、非出定、文雄上人、

律蔵いまだみず

明治十五年四

月二十二日記

今 潮音上人の所蔵を得たり、 潮音上人の『彈擱邪網編』

二卷あり、また『彈擱邪網編』といふ寫本あり、一巻、

仲基は印坊に奉公せし由、行誡上人の話、印坊は宇治黄檗

山の京師の一切經の板をすり出すところと云。

潮音上人は、駒込西教寺にて、狩谷栲齋とも親しく、行誡上人な
どもの問れし人なり。」（三村竹清『随筆 佳氣春天』、八十八頁）

三村竹清（清三郎）〔1876－1953〕が、橋本律蔵の書入れを紹介している箇所は、以上である。

『出定後語』の破書、非出定、文雄上人、

律蔵いまだみず 明治十五年四

月二十二日記

今 潮音上人の所蔵を得たり、

上記のこの部分の解釈としては、

「『出定後語』の破書」である 「非出定」、「文雄上人」作の、
「潮音上人の所蔵」本を律蔵は今「得たり」、

と理解してよいと思われる

「律蔵いまだみず」は、「律蔵はこれまで見るができなかった」が、「潮音上人の所蔵」本を律蔵は今「得たり」、と解釈できよう。

橋本律蔵は、明治十五年十月三十一日に、亡くなっているので、
「明治十五年四月二十二日」は、死の半年前である。この日付は、
律蔵がこの「書入れ」を記入した日であろう。

橋本律蔵旧蔵『非出定後語』の「識語」の日付は、
「明治十四年十一月十六日」である。

「律蔵いまだみず」を、上記のように解釈すれば、二つの日付は矛盾しないであろう。

この三村竹清（清三郎）旧蔵、すなわち橋本律蔵旧蔵の『出定後語』は、今 どこにあるのであろうか。